

第106回日本精神神経学会総会

教育講演**双極性（感情）障害の精神医学史
——西欧古代の文献に関する一考察——**

酒井 明夫

(岩手医科大学神経精神科)

古代ギリシャの『ヒポクラテス集成』に含まれる「疾病について第1巻」（紀元前4世紀前半）にはメランコリーからマニアへの移行をほのめかず記述がある。しかし今日言われる双極性障害の概念が詳述され始めるのは2世紀である。なかでもカッパドキアのアレタイオスの著作には何カ所か本疾患を示唆する箇所がある。その後6世紀のトラレスのアレクサンドロスははっきりとメランコリーからマニアへの移行を記している。古代におけるメランコリーとマニアは広範囲の狂気を指すと同時に、それぞれ今日のうつと躁・錯乱にあたる限定的な意味を体現しており、これらは全体として古代の狂気の異種性を形作っていたと推定される。

<索引用語：双極性障害，メランコリー，マニア，古代西欧世界>

History of Bipolar Disorder : A Consideration on Ancient Western Literature

We can find the description suggesting pathological shift from melancholia to mania in *Diseases I* (4th century BC) of *Corpus Hippocraticum*. However, it was 2nd century that detailed account concerning bipolar disorder in modern sense was supposed to appear. Especially the text of Aretaeus of Cappadocia contained several paragraphs indicating this disease. Thereafter in 6th century, Alexander of Tralles clearly mentioned the transition from melancholia to mania. In ancient world, both melancholia and mania embodied vast area of general mental derangement on the one hand, they had restricted meaning of depressive and manic state respectively in modern sense on the other. The situation mentioned above formed the heterogeneity of ancient madness as a whole.

<Key words : bipolar disorder, melancholia, mania, ancient Western world>

1. はじめに

古代医学文献の集積『ヒポクラテス集成』（*Corpus Hippocraticum*）の中に「疾病について第1巻」という著作がある。成立時期は紀元前4世紀前半と考えられるが、そこには以下に示す

ような興味深い記述がある。

「フレニティスの患者は、錯乱状態（パラノイア）に陥ったメランコリー患者にもっともよく似ている。というのも、胆汁と粘液によって血液が

第106回日本精神神経学会総会=会期：2010年5月20～22日，会場：広島国際会議場・アステールプラザ

総会基本テーマ：求められる精神医学の将来ビジョン：多様な領域の連携と統合

教育講演：双極性（感情）障害の精神医学史——西欧古代の文献に関する一考察—— 座長：小澤 寛樹（長崎大学医学部精神神経科）

かき乱されるとメランコリー患者もまたこうした病的状態に陥って錯乱状態になるからであり、彼らの中には狂気に至る者さえいる。フレンティスにおいても同様であるが、ただし、メランコリー患者の場合よりも胆汁の作用が弱い分だけ、狂気(マニア)と逸脱はそれほど激しくない^{5,6)}

フレンティスというのは『ヒポクラテス集成』を起源とする概念で、熱を伴った急性の精神障害、今日ではせん妄と推定される状態である。ほかにこの短い一節にはパラノイア(錯乱状態)、メランコリー、マニアといった近代精神医学にとって重要な用語が含まれているという点で興味が尽きない。それはともかく、本論の主題からして重要なのはメランコリー患者がマニアに移行する場合があるという記載内容である。しかし問題は、この時代のマニアがきわめて広い概念で、重症の狂気というごく一般的な意味で用いられていたことである。それはパラノイアやメランコリーに関してもほぼ同様である⁹⁾。それでも、これらの用語が体現する病態の間には当然のことながら何らかの概念上の差異が存在したことは疑いない。われわれはこの点について史家 Jackson, S.W. の言葉に耳を傾けるべきだろう。

「古代ギリシャでは、マニアはしばしば限定されない一般的な意味での狂気を表していたと思われるが、時にそれは荒れ狂う狂気というより限定的な意味を担っていた。そしてメランコリーとその同族語は逸脱や神経質などを指し示すために用いられていたが、それと同時に、長く続く『恐怖や悲嘆』を呈する障害という、より明確に規定された意味を担っていたのである」⁷⁾

Jackson は古代におけるメランコリーとマニアそれぞれの両義性を指摘している。Jackson の見解を援用すれば、先に引用した「疾病について第1巻」の当該箇所では両者がより限定的な意味で用いられている可能性もあるわけである。もしそうだとすれば、テキストの年代からしてこれは双

極性障害に関するもっとも古い記述の一つと考えていいのかもしれない。それでも、位相を変える病がより示唆的に、より詳細に語られるのはもっと後のことである。

2. カップドキアのアレタイオスのテキスト

メソジスト学派の創設者テミソン(紀元前1世紀)は、マニアとメランコリーの間の関連性に注目していたと推定されている。それは、ソラノス(98~138)のテキスト(5世紀のカエリウス・アウレリアヌスの著作という説もある)に「テミソンの後継者たちは、他の多くの者たちと同じように、メランコリーをマニアという疾患の型と考えている」⁴⁾という記述があるからである。ここで興味深いのは、ソラノスの生きた時代すなわち2世紀には、メランコリーとマニア両者の近縁性を唱える人々が少なからず存在したという事実である。実際にソラノスは同じ著作においても一つの例を示している。「アポロニウスは、メランコリーはマニアの型と考えられるべきであると言う」⁴⁾

2世紀という時代は双極性障害の概念史においてきわめて重要な時代として位置づけられる。この時代の医学者たちのなかでも、マニアとメランコリーの結びつきに関してもっとも重要なテキストを遺したのはカップドキアのアレタイオス(81~138)である。精神医学史家 Zilboorg, G. はこの時代とアレタイオス双方の重要性をこう表現している。

「アレタイオスの時代に医者たちは、ある種の異常昂揚状態、すなわちいわゆるマニアはある種の異常抑うつ状態、すなわちいわゆるメランコリーに関連していることにますます気がつき始めた。この二つの病的状態は一つの病気の表現であるとの考えにアレタイオスは傾いた」(ジルボーク、神谷美恵子訳, p. 47 [一部改変])²¹⁾

ここで述べられているように、従来アレタイオスは、メランコリーとマニアが一つの疾患に帰属

すること、すなわち躁うつ病もしくは双極性（感情）障害を最初に記載した医学者と位置づけられてきた。その根拠としてもっとも知られているのは記念碑的著作『慢性疾患の原因と症候について』の「メランコリーについて」に含まれる次の一文である。

「私には、メランコリーはマニアの始まりであり、かつその一部であるように思える。というのも、狂気に捕らえられた者たちの場合、気持ちは時に怒り、時には快楽に変わる（動詞トレポー）のに対し、メランコリーの者たちの場合はそれが悲嘆や落胆にしか変わらないからである」³⁾。

この文章を読む限り、マニアはより包括的な概念であってメランコリーを内に含むものと受け取ることができる。しかしそれと同時に、感情・情動的な問題点に関しては、マニアはいわゆる「躁」、メランコリーは「うつ」に当てはまるという印象も与える。

記載の構造上鍵となるのが「トレポー」という動詞である。これは方向を転ずる、変わるという意味を持ち、怒り、快楽、そして悲嘆と落胆という、気持が取り得るいくつかの方向性を取り持ち、指し示しているわけである。

もう一つ位相の交代を示唆する箇所がある。メランコリーに「軽快がもたらされると快活さが現れてくるが、こうした者たちは狂気に陥る」³⁾という記述がそれである。この引用部分の狂気とはマニアの関連動詞「マイノー」である。

また、この章のすぐ後に続く「マニアについて」には次のような記載も見える。

「方向性の変化がメランコリーに向くとき、
「マニアに向くとき…」³⁾。

この箇所が示しているのは、動詞「トレポー」の関連名詞「トロペー」すなわち「転回や変化」がマニアとメランコリー双方へと向くということである。それが一つの文章内にまとめられている。

マニアとメランコリーとの関連性を示唆する部分をさらに2カ所引用し、提示する。

「同様に、以前狂気の状態にあった者たちはメランコリーに罹りやすいのである」³⁾

この場合、「狂気の状態にあった者たち」と訳出した部分の中心となるのは「エクマイノー」であり、これも「マイノー」と同様マニアと関連する動詞である。

「したがってもし、この病気が重篤なら、気性が変わりやすく、感覚は研ぎ澄まされ、疑り深く、何のきっかけもなく苛立ち、マニアがふさぎに傾く時には落胆が襲うのである」³⁾

もちろんここで注目すべきは「マニアがふさぎに傾く時」という表現である。そして「傾く」もしくは「転回する」と解される語も前出の動詞「トレポー」である。

他にもアレタイオスが双極性障害の記載者とされる理由はいくつかあり、その一つが著作においてメランコリーとマニアが隣り合って章立てされているという事実である。しかし歴史家 Jackson は、それは古代の慣例に過ぎず裏づけとはならないとしている⁷⁾。疾患論の見地から挙げておかなければならないのは、マニアとメランコリーは双方とも慢性疾患であり、熱を伴わないという共通点を有することである。

アレタイオスはメランコリーとマニアに現れる「空想」についても述べている。まずメランコリー患者については、「彼らは毒を盛られるのではないかと疑い、人を嫌って砂漠に逃げ出し、迷信深くなり、生きることを厭う」³⁾とされる。一方マニアの患者たちの空想は以下のようなものである。「彼らはまた、途方もない空想（ファンタジア）にとらわれる…ある者は水を飲もうとしないが、それは、自分がレンガであると思い込んでいて、液体によって溶けてしまうことを恐れるが故なのである」³⁾。これらの記載を見る限り、メランコリーとマニアそれぞれに現れる「空想」には、あまり質的な差異は感じられない。

3. 転回と変化：「トロペー」について

アレタイオスのテキストでは、変化を意味する動詞「トレポー」と関連する名詞「トロペー」の両者が印象的な仕方登場し、しかも重要な役割を担っていた。ここでは後者に目的を絞り、それがアレタイオスの時代、他の著作、医学以外の著作において実際にどのような文脈で用いられ、どのような意味を担っていたのかを見てみたい。対象となる文献はこの医師と同様、ギリシャ語で著作活動を行った同時代人プルタルコス（46?～120?）の著作群である。彼は歴史上有名な人物に関する評伝『英雄伝』の著者として名高いが、そのなかの伝説の王ヌマについて書かれた章につきのような一節がある。

「突然空に大きな異変が起こり風と雨を伴う雲が地に向かって降りて来たので人々は驚いて散り散りに逃げたが、…」(河野与一訳 [一部改変])^{11,12)}

「異変」と訳されているのが「トロペー」である。プルタルコスはこの語を、一連の大きな出来事の連鎖を語る始まりの文章のなかで用い、天変地異的な天候の激変という意味を与えている。しかし同じ『英雄伝』に収録された「アルキピアデス」ではかなり趣が異なる。

「…アルキピアデスのゆたかな天分のひとつは、人の心をとりにしてしまおう手くだったからだ。つまり彼は、あのカメレオンよりもすばしっこく姿をかえることができ、他の人の習わしとか、くらしっぷりとかに、すぐさま、同じ気持になって、とけこんでゆけたのだ」^{13,14)}。

カメレオンが引き合いに出されて描かれているのは驚くほど柔軟な心性、相手によって対応やライフスタイルを自由に変えられる人間性である。ここで「トロペー」に期待されている表現上の役割とは、そうした心性の千変万化な様を伝えることである。プルタルコスは長大な倫理論集『モラ

ーリア』のなかでも他の生物にたとえて人間の心性を論じている。そこでの語り口はかなり辛辣である。

「へつらい屋の変身ぶりは甲烏賊（コウイカ）が場所にに応じて体の色を変えるのに似ていますが、どう変身しようと、相手がへつらい屋だということはこうすれば簡単に見破れるのではないのでしょうか。つまり、…」^{15,16)}

今引用した箇所「トロペー」は、相手に合わせて物腰や言動を変えるへつらいの様相である。

それはまた他の箇所では、娘を失ったプルタルコスが自分の妻、亡くなった娘の母親を慰めようと書いた書簡のなかにおいて、人間の運命の変転を指す言葉として用いられる^{17,18)}。具体的な事物の変化を示す場合もある。『モラーリア』の他の箇所では、トロペーとはワインが酸っぱくなることなのである¹⁹⁾。

プルタルコスの著作における単語「トロペー」の用法に何か共通するものはあるのだろうか。指摘できるのは次の二点である。まずそれらはいずれも現実に起こり得る変化であって、宗教的もしくは超自然的な力による変化ではないことである。つぎに、天候、対応、態度、運命などいずれについてもいわば激変を体現していることが挙げられる。ワインから酢へという変化にしても、日常生活におけるワインの重要性を考えれば、それは取り返しのつかない変化と言っているはずである。変化とはつねに何ものかの変化であり、トロペーは人間の営みの中で現実に起こる、何ものかにおける激越な変化を表していたという推測も成り立つだろう。

この語がアレタイオスの医学的著述においても同様の意味で用いられているとすれば、それは心的・精神的な領域における激変を体現していることになり、互いに対照的な精神病理間の行き来を表していたことが想定される。

4. 症候論と病因論

ここでアレタイオスの記述を思い出しながら他の医家たちの記述を概観し、症候論から病因論へと古代の記述を辿っていきたい。まずは前出のソラノスが記載しているマニアの症状を挙げていく。

「マニアという疾患が発現するときは、熱を伴わない理性の障害が起こる。こうした理性の障害は重篤なこともあり、軽症の場合もある。それは表面に現れる形式や外観においてさまざまに異なるが、その本質や性格は同じである。マニアが心に巣くうと、それは時に怒り、時には享楽、時には寂しさや虚しさ、そして時にはまったく無害なものに対する激しい恐怖などとして姿を現す。それゆえ患者は洞穴を恐れ、みぞに落ちるのではないかという恐怖に捉えられ、何らかの理由で恐怖を引き起こすものを怖れる。（中略）そしてマニアもしくは狂気とは、時には持続的であり、時には軽快する時期を持つ。患者は自分の仕事を思い出せないこともあり、自分が忘れていているということを自覚できない場合もあり、感覚すべてが障害され、他のさまざまな形式の逸脱を体験する。この狂気の犠牲者のうちある者は自分を雀であると思ひ込み、他にも自分を雄鶏、土でできた壺、レンガ、神、雄弁家、悲劇役者、喜劇役者、などと思ひ込む者もあり、またある者は自分を穀類の茎であると思ひ込んで自分の居るところが宇宙の中心であると宣言し、また別の者は赤ん坊のように泣き叫び、抱いてほしいと懇願する。ほとんどのマニアの患者では、発作が起きている時には、目は血走って視線が固定される。ずっと覚醒が続き、静脈は膨らんで頬に赤みがさし、体が硬くなって異様に力が入る」⁴⁾。

熱を伴わないというのは先に紹介した通りだが、重症度もまちまちで経過も一樣ではない。精神機能別に見ても、怒りや享楽や恐怖など感情や情動の有り様もさまざま、意識や記憶の障害、感覚すべての障害、妄想を思わせる思考内容の障害、自我意識障害と呼んでもいいような状態が現れる。

さらに不眠やカタレプシー様の身体症状なども含み、ソラノス自身が言うように、多種多様な症状形式という他はない。こうした症状群が言われるようにもし同じ本質、同一の疾患に属するならば、それはきわめて過包含的な疾患ということになるだろう。

メランコリーの方はどうだろうか。

「メランコリーが実際に存在するときの兆候：心理的苦悩や苦悶、落胆、寡黙、家の者に対する敵意、生きようとする欲望が生じるときもあれば死への願望に捉えられるときもある、自分に対して陰謀が企てられているという疑念、理由もなく泣く、意味不明のつぶやき、たまに陽気になる、とりわけ食後に起こる心窩部の膨満感、四肢の冷感、発汗、食道や心臓から肩甲骨の間にまで達する鋭い痛み、頭重感、黒緑色もしくは青みがあった体色、脱力感、弱々しさ、魚臭などの悪臭を伴うおくびと消化不良、腸のけいれん、黄色みがあった、さび色をした、もしくは黒いものを嘔吐する、同様のものを排出する下痢」⁴⁾

不調と衰弱を思わせる不快な身体症状、そして否定的な方向に収斂する精神症状が並ぶ。若干の揺らぎこそあれ、感情の方向性は希死的な面も含め、ほほうつ的という言葉で要約されるだろう。

病因論に関しては、ソラノスはマニアとメランコリーはまったく異なる疾患であると主張する。

「だが、これら二つの疾患は別ものとされるべきである、というのも、メランコリーでは主として食道が冒されるのに対して、マニアでは頭が冒されるからである」⁴⁾。

症候論的には似た部分も多いものの、これら二つの疾患は責任身体部位によってはっきりと区別されているのである。

症候論と病因論という点に関しては、アレタイオスの同時代人エフェソスのルフス（98～117）が重要な記述を遺している。

「メランコリーには二種類あることを知らねばならない。メランコリー患者の中には、本質的に、つまり生まれつき持った体質のためにそうなる者がおり、これに対して他の者は、悪い食生活のためにそうなるのである。この二番目のものは、ゆっくりと目立たないかたちで発症していく。黄胆汁が過剰に燃焼すると、それに引き続いて、患者たちは狂気（パラプロシュネー）に陥り、大胆不敵となり、いつもよりも怒りっぽくなり、暴力的となり、きわめて危険な行為に出るが、これらは胆汁がさらに増加したときにさらに著しくなる。そして、時がたち、この火が消えると、彼らは陰鬱となり、悲哀を感じ、臆病となる。身体全体が黒胆汁性の血液で満たされているために、治療はまず瀉血から始めなければならない」²⁰⁾

ルフスが記している病態には二つ大きなポイントがある。まず、症状と状態像が怒りや興奮状態からうつ状態へと変化していく様が語られていること、それと並んで、前者が黄胆汁の過剰な燃焼で起こり、後者がその結果作り出される黒胆汁の蓄積でもたらされるという体液説的病因論が明瞭に記されていることである。古代ギリシャの病因論を支配した体液説とは、人の身体は黄胆汁、黒胆汁、粘液、血液の四体液で構成され、いずれかの過剰が性格や体質、そして病の発生やその性質を決定するという理論である。この場合、患者の体内では黄胆汁が過剰に燃焼してできる黒胆汁が血液を満たしているために、治療はまず何よりもそれを体外に出すことなのである。

ルフスは黄胆汁の燃焼によって起こる上記状態をメランコリーとしていたが、7世紀の医師アイギナのパウロス（625～690）は、それは凶暴な狂気マニアに他ならないと言う。

「症状が過剰な熱で黒くなった黄胆汁によって引き起こされるような場合、マニアと呼ばれる病が発現して制御不能の狂気が到来し、この病に冒された者たちは何も知らずに近づいてくる人々を殺してしまうのである」¹⁰⁾

ルフスとパウロスの言説をもし折衷することが許されるならば、そこには明確な病因論に裏づけられた双極性障害の経過像が浮かび上がると言えるかもしれない。

パウロスの百年ほど前に生きたトラレスのアレクサンドロス（525～605）の記載はもっと直接的である。彼によればメランコリーはいったん発病したら早期に治療しなければならない、というのも、もしそれが遷延してしまうと、「ほとんど不治の病となり、もはやたんなるメランコリー状態とは呼べないもの、すなわち激越の病となるからである。実際、マニアとはメランコリー状態が増悪して粗暴さの極へと押しやられたものに他ならないのである」^{1,2)}。

テキストの文面においても、直接的にマニアとメランコリーという二つの名詞が用いられ、両者のつながりと移行が明示されている。

最後に紹介する4世紀の医書編纂者オリバシウス（323～400）は、ある意味で示唆的な記述を自著に載せている。「マニアについて」という短い一説の書き出しは次のようなものである。

「マニアの治療はメランコリーのそれと同じである」⁸⁾

これは想定に過ぎないが、オリバシウスのこの記述は治療的な観点からマニアとメランコリーの疾患論的同質性を示唆したものと受け止めることができるのかもしれない。

5. おわりに

西欧古代において双極性障害がいつどのように姿を現したのか、正確に言えばいつどのように記載され始めたのか、これは答えるのがきわめて難しい問いであり、それと同時にきわめて興味深い問いでもある。マニアとメランコリーという二つの語彙が代表する概念は一樣ではないがゆえに、今日の躁とうつに当たる限定された概念の交代という現象を同定するのは困難な課題となる。しかし一方では、はるか以前の文献記載のなかに双極

性障害の影を辿ることはこの概念の時間的・文化的スペクトラムを現出させ、それはわれわれに双極性障害の概念の再考という重要な契機を与えるのである。

今回の試みはもとより不十分の極みであり、何か新たな事実が明らかにされたわけでもなく、何らかの仮説が証明されたわけでもない。しかし、時の流れが今日で言う双極性障害の概念を次第に明確にしていく様はかすかに可視化されたと言えるかもしれない。これまで躁うつ病もしくは双極性（感情）障害と呼ばれてきたものとはいったい何だったのか、この問いを改めて立てていくきっかけになればと思う。

文 献

- 1) Alexandre de Tralles: Œuvres Médicales (introduction et traduction Brunet, F.). Geuthner, Paris, 1933-1937
- 2) Alexander von Tralles: Alexander von Tralles (Original-Text und Übersetzung nebst Einer Einleitenden Abhandlung Ein Beitrag Zur Geschichte der Medicin von Puschmann, Th.). W. Braumüller, Wien, 1878-1879
- 3) Aretaeus of Cappadocia: Aretaeus, the Cappadocian (ed., trans., by Adams, F.). Sydenham Society, London, 1856
- 4) Caelius Aurelianus: On Acute Diseases and On Chronic Diseases (ed. and trans. by Drabkin, I. E.). The University of Chicago Press, Chicago, 1950
- 5) Hippocrates: Œuvre Complètes d'Hippocrate VI: De l'Art, De la Nature de l'homme, Du Régime salubre, Des Vents, De l'Usage des liquides, Des Maladies livre premier, Des Affections, Des Lieux dans l'homme, De la Maladie sacrée, Des Plaies, Des Hémorrhoides, Des Fistules, Du Régime (ed. by Littré, É.). Baillière, Paris, 1849
- 6) Hippocrates: Hippocrates V: Affections, Diseases I, Diseases II (trans. by Potter, P.). Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1988
- 7) Jackson, S. W.: Melancholia and Depression: From Hippocratic Times to Modern Times. Yale University Press, New Haven, Connecticut, 1986
- 8) Oribase: Oeuvres d'Oribase (traduit, Daremberg, Ch.). L'Imprimerie Nationale, Paris, 1873
- 9) 大塚耕太郎, 酒井明夫, 黒澤美枝ほか: ヒポクラテス集成における mania について. 精神医学史研究, 4; 7-19, 2000
- 10) Paulus Aegineta: The Seven Books of Paulus Aegineta I (trans. by Adams, F.). The Sydenham Society, London, 1844
- 11) Plutarch: The Parallel Lives I: Theseus and Romulus, Lycurgus and Numa, Solon and Publicola (trans. by Perrin, B.). Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1914
- 12) Plutarch, 河野興一訳: プルターク英雄傳(一). 岩波書店, 東京, 1952
- 13) Plutarch: The Parallel Lives IV: Alcibiades and Coriolanus, Lysander and Sulla (trans. by Perrin, B.). Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1916
- 14) Plutarch, 村川堅太郎編: プルタルコス英雄伝(上). 筑摩書房, 東京, 1999
- 15) Plutarch: Moralia I: The Education of Children, How the Young Man Should Study Poetry, On Listening to Lectures, How to Tell a Flatterer from a Friend, How a Man May Become Aware of His Progress in Virtue (trans. by Babbitt, F. C.). Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1927
- 16) Plutarch, 柳沼重剛訳: 似て非なる友について: 他三篇 (健康のしるべ), (怒らないことについて), (爽快な気分について). 岩波書店, 東京, 1988
- 17) Plutarch: Moralia VII: On Love of Wealth, On Complacency, On Envy and Hate, On Praising Oneself Inoffensively, On the Delays of the Divine Vengeance, On Fate, On the Sign of Socrates, On Exile, Consolation to His Wife (trans. by De Lacy, P. H. and Einarson, B.). Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1959
- 18) Plutarch, 柳沼重剛訳: 愛をめぐる対話: 他三篇 (結婚訓), (妻を慰める手紙), (烈女伝). 岩波書店, 東京, 1999
- 19) Plutarch: Moralia XII: Concerning the Face Which Appears in the Orb of the Moon (trans. by Cherniss, H.). On the Principle of Cold, Whether Fire or Water is More Useful, Whether Land or Sea Animals are Cleverer, Beasts are Rational, On the Eating of

Flesh (trans. by Cherniss, H. and Helmbold, W. C.).
Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts,
1957

20) Rufus D' Éphèse: Œuvres de Rufus D' Éphèse
(traduit, Daremberg, Ch., Ruelle, Ch, É.). A

L'Imprimerie Nationale, Paris, 1879

21) Zilboorg, G.: A History of Medical Psychology,
W. W. Norton Company, New York, 1941 (神谷美恵
子訳: 医学の心理学史. みすず書房, 東京, 1965)
